
通帳【Bank book】 ～偶然と必然で奇跡的に巻き込まれた青少年の物語～

龍門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

通帳【Bank book】（偶然と必然で奇跡的に巻き込まれた青少年の物語）

【Nコード】

N3361M

【作者名】

龍門

【あらすじ】

ある日、平々凡々な青少年（16歳）は道ばたで赤い通帳を拾う。それを何となく開いて中身を見たら、『現在—10万』と書かれていた。

—？それになんだこの通帳は！？と通帳を捨てようとした時、いきなり美少女に襲われてしまった。しかも美少女は「貴様所持者だな！？」とか叫ぶ始末。

「所持者」？何だそりゃ！！そんな者になった覚えはねえー！！だ

けどそんなの聞かずにあり得ない攻撃をしてくる！！一体どうな
てんの！？

これは青少年が偶然、はたまた必然、もしくは奇跡的に「保持者」
になってしまった物語。報われない青少年に幸あれ——・・・。

第一話Ⅱ平々凡々の青少年Ⅱ『1』Ⅱ巻き込まれる編（前書き）

どうも。初めましての方初めまして。お久しぶりの方お久しぶりで
す。

現在進行している別の小説のネタが詰まっているので気晴らしに書
きました。

この物語りは異世界などのファンタジーではなく、現代的なファン
タジーを目指そうと思っています。

主人公の能力はチートですが、今回は無双なんてさせませんよ（笑）
。

作者の作品の中では今までと違う主人公ではないかと思っています。

それでは、駄文でもよろしければ読んで下さい。

第一話Ⅱ平々凡々の青少年Ⅱ『1』Ⅱ巻き込まれる編

現在、日本は就職難とからしい。

まあ、まだ高校生の俺にはあまりリアルさが伝わらない。

それと、未成年の犯罪が増えたらしい。

これも俺に取ってはリアルさが無い。

結構今の世界はリアルの無い世界だと思う。

皆が予想しなかった事が次々起きる。

大人が信じられないと言う出来事を、子供がどうしてそれがリアルだと理解出来る？

どっかの国が戦争を起こした、テロだと言ってもそれは日本じゃない。

飛行機に乗って、乗り継いで、車で何時間。そうしてやっと着く様な所で戦争が起きていると言われて、リアルさが伝わる訳がない。

TVニュースで観る世界は何処か違う世界の話みたいで、リアルさが足りない。

昔の話。未来の話。今が解らないのにそれがどうやって解るのか。

とまあ、長々と俺は考えていた。

俺の名前は霧赤・前だ。^{キラアカ・ゼン}

「前向きに生きろ」的な感じで付けたと直ぐ解る安直な名前だ。それが俺のトラウマになろうとは思ってもよらなかっただろう。

俺というのは平々凡々な容姿。見る角度によってはイケメンに見えなくもない。と、言う中途半端な感じの高校一年生だ。

で、何故俺がここまで長い面倒臭い事を考えていたかと言うと、現実逃避していたのだ。

えっ？何でかって？

高校生が現実逃避する理由を考えてみて欲しい。

彼女にフラれた・受験失敗・親父リストラ・明日世界滅びるらしいよ！！

最後はボケだ。

まあ、その中でも俺は良くあるワンシーンを体験している。

それは――・・・。

「うおおい！！！！さっさと財布に入っている金出せや！！！！」

「コイツビビって声も出ねえーんだよ！！めっちゃ笑える！！！！」

「さっさとボコって財布貰って行こうぜ！！ついでに携帯も貰って女呼び出すか？」

・・・お解りでしょうか？

正解は数人の不良に裏路地で囲まれて逃げ場無し、と言う事です。現実逃避したくもなる。漫画みたいな状況に陥った俺。

「おいゝさつさと財布出せや!!」

一人の不良が俺の顔に顔を近づけながら叫ぶ。

因みに、俺は漫画などのキャラの様に実は武道の達人とか。知り合いに凄まじい喧嘩の達人が居るとか。

残念な事にそれは一切無い。

何故なら俺は平々凡々だからだ。・・・自分で言っていて悲しい。

俺は何処にでも居る平々凡々な男子高校生であり、青春って何?とか言い出す様な反骨野郎な訳で・・・。

「マジコイツさつきから何黙ってる訳!?ぶっ殺しちまうか!!」
デブにサングラスのテンプレ的な格好の不良が叫ぶ。

因みに、彼はヲタクと呼ばれる人間だ。

だが、フィギュアとかは専門外。

俺はアニメとギャルゲー専門だ。

だが、最近ギャルゲーはやっていない。少し悲しくなってしまうのが原因だ。

その原因と言うのも、徹夜でやっていたギャルゲーがクソゲーだっただけの話。

今日はこれからTSUOAYAに行ってCLONADをもう一度借りようと思っていたのに。

どうしてこうなった?

理由は簡単。回想しなくとも。

肩ぶつかった。はい!裏路地へGOです。

最近の若者はキレイやすいと、TVニュースに良く出ている白髪の男が言っていたけど、やすいなんてもんじゃない。

俺凄い謝ったのに即だよ。

そしていつの間にか不良さん達が増え出すし。

影分身でも使えるのかな？

もうAとかBだけじゃ足りないよ。てか、アルファベットだけじゃ足りないよ。

A(2)とかにしないと足りないよ？って、ぐらい居る。

えっ？何このリンチフラグ立っているの？てか、死亡フラグ立っているよね。

はぁ、大人しく学校から真っ直ぐ直帰すれば良かった。

You O u b eとかで見れば良かった。

「黙ってんじゃねえーよ！！ぶっ殺すぞ！！！！！！」

俺の目の前に居るロン毛の不良が叫ぶ。

「す、すいません」

情けなく俺は頭を下げる。

ガシッ！！！

「うっ！」

胸倉掴まれて壁に叩き付けられる。

「舐めてるのか？んあ？さっさと金出せやッ！！！！！！」

苦しくて財布出せません。

なんて言ったら余計怒らせるだろうな。これは飲み込もう。

どっかの最強の武道家とかが俺の事弟子にしてくれないかな。梁山泊とかねえーかな。

そんな事を考えていたら、

ドスツツッ!!!

「ゲホッ!!!」

ロン毛の拳が俺の腹に入る。

腹筋とか無い訳で、その場に崩れ落ちる。

酷い・・・いきなりですか。てか、もうさっさと財布取って消えてくれよ。

「チッ!!!」

ロン毛は舌打ちをして、俺の鞆から財布を取り出す。

黒い長財布だ。

それを見て俺は見えない様にニヤリと笑った。

そう。その長財布は金とか何も入ってないのだ。

せいぜい500円程度。それとテレホンカードだけ。

黒い長財布はフェイク。

絡まれて取られても良い財布だ!!!

因みにちゃんとした財布は俺の学ランの懐に入っている。

これで退いてくれる筈!!!

・・・などと儚い事を考えていた時期も俺にはありました。

「デメエー舐めてんのかッ!!!」

ロン毛が俺の腹を蹴り上げる。

「グエッ!!!」

若干宙を浮く。

その時、先程胸倉を掴まれボタンが外れてしまった学ラン。

ポトッ――。

お解りですね？ある意味お約束な展開。

懷から財布が!!!!的な感じです。

俺と不良達はその財布を見て暫く止まる。

ああ、異常な程汗が流れ出る。

「・・・ああ・・・財布見つかりましたね」

一応ね。俺別に隠してないから!!!的な主張。

・・・ダウトですよ。

「ぶっ殺す」

・・・はい。

——10分後——

「ゲホッ！オエッ・・・痛ッッ」

見事にフルボッコです。殺されなかっただけでも儲けか。

財布は取られて行きました。

1万円・・・。携帯は取られませんでした。てか、家に忘れていたので。

それよりも、動けない。

肋折れたのでは？

鼻血などダラダラ出てます。

痣だらけ。学ランボロボロ。

明日の授業はどうしろと？あつ、明日開校記念日だった。だが明後日は！！

てか、動けません。

「誰かぁ・・・助けてえ」

小さな声で助けを呼ぶ。

聞こえる訳がない。だけど、大きな声で助けを呼ぶ程の度胸は俺には無い！！

小心者なので・・・。

これからどうしようか。

家に帰って母さんにどう説明しよう。

てか、帰れるの？

もう嫌だなあゝ。

「痛ッ！・・・ふうゝ」

寝返りをして、仰向けになる。
辺りは薄暗くなっている。いや、裏路地だから余計に薄暗く感じるのか。

ああ、空が茜色だ。

誰か助けてくれないかな・・・。出来れば可愛い女の子で。

「はあゝ・・・ん？」

自分が思っていた事に溜息を吐き、ふと見る。

何かが落ちている。

俺の持ち物？いや、あんな赤いモノ俺持ってない。
んじゃ、先程不良達の持ち物？

「痛ッ！・・・ぐッ！・・・」

匍匐前進しながらその落ちているモノに近づく。

「・・・手帳？いや、これは通帳か・・・」
近づき、それを手にとって見る。

だが、赤い通帳って。しかも銀行名も何も書かれていない。
真っ赤だ。不気味だな。

だが、何故か通帳だと思ってしまった俺。
暫く眺めながら、ゆっくり通帳を開く。

「・・・は？」

通帳に書かれたモノを読んで目を丸くする。

普通、通帳は残高的なのとか今までの引き出した額や振り込んだ額が記入されている筈だ。

だが、この通帳には・・・。

『現在残高—10万。残り期限は4日です』

・・・何だこりゃあ？

何かの悪戯で誰かが作ったのか？

てか、通帳に血着いちゃったよ。

まあ、真っ赤だからばれないか。でも血って時間が経ったら色変わるんだよねあゝ。

でも仕方無いだろうに！！流したくて血を流している訳じゃないしな！！

「それにしても・・・」

通帳のページを捲ってみるが、全部真っ赤だ。

一番最初のページに白い字で先程の文が書かれているだけ。

気味悪いな。

何なんだ？

・・・もしかして、読んだら呪われる何かとか！！

ヤバイな。今日は厄日だな。

マジ、明日地球滅びないかな。

・・・駄目だ。まだ観たいアニメや最後が気になる漫画もある。

てか、俺いつまでこの通帳持つてる訳。何かやばそうだし。

持っている通帳を捨てようとするが。

「・・・俺の側に置いて、もし持ち主が戻って来たら何か言われそうだな」

「テメエー中見やがっただろ!？」的な感じに。

それは駄目だ。死にかけの体にもう傷増やしたくない。

てか、さっきから鼻血が通帳に・・・。

「もうどっかに投げ捨てた方が良いな・・・」
辺りを見渡す。

空で烏がクルクル回りながら鳴いている。

人影は皆無。目撃される事は無い。

「今なら・・・ん？」

遠くに見えるゴミ箱に、通帳を投げようとした瞬間視界に緑色が映る。

何て言うか、景色が一瞬緑色に変わった。

だが、それも直ぐに元通りになる。

何だったんだ?もしかして殴られた時に頭を・・・?
それはヤバイな。格好悪すぎる。

もう一度空を見上げる。

「はぁー・・・何かもうどうでも良いな」

此所までボロボロで何かをしよう何て気は起きない。

このまま眠りたい気分だ。・・・駄目だな風邪引くわ。

暗くなってきた空で、烏が飛んでいる。

真っ赤な通帳をもう一度開いてみる。

「何度読んでも変わらないんだ・・・け、ど・・・」

何だ・・・これ？

最初のページ以外何も書かれていなかった通帳。

だが、何かが書かれている。

『アイギス	100,000円
アスカロン	210,000円
アパラージタ	92,000円
エッケザックス	106,000円
グングニル	500,000円
トライデント	140,900円
村正	135,000円

何だこれ？通帳だろ？これ？それにさっきまで何も書かれてなかったのに。

しかも・・・この『グングニル』って、あれだよな。

何で神の武器が？

それに『アスカロン』も知ってるぞ。確かとある魔○の禁書○録

で登場したよな。

だが神の武器じゃなかった様な・・・。

そんな事より、どうして書かれてなかったのに!!!!!!
この通帳マジ怖い!!! ヤバイよ。マジヤバイよ!!!!!!

通帳越しに、ふと空を見る。

烏が飛んでいる。

烏が・・・烏が・・・。

「烏？」

空に明らかに烏の形をしていない何かが飛んでいる。
いや、飛んでる？

俺には・・・落ちてきている様に見える・・・が？

すると、落ちてくる未確認の何かが何かをしている。
その瞬間、視界がまた一瞬緑色になる。

「うっ!!」

それに驚き目を瞑る。

ボウツツツツ!!!!!!

「へっ？」

瞼を開いた瞬間、目の前に凄まじい程大きな火の玉が。

「なななななななななツツツ!!!!!!」
ボロボロで動けなかった筈だが、確実な危機が迫っていた為か火
事場のクソ力的なんが発揮。

火の玉を避ける為に横に飛ぶ。

ドゴオオオオオオオオオオンツツツ！！！！！！

「ぬおおおおおおおおおッッッ!!!!!!!!!!!!!!」

爆風に押され、コンクリの壁に激突した。

「ぐのばツツ……!!!!」

顔を壁に付けながらズルズルと倒れる。

その時の俺の脳はフルスロットルで回転していた。
何故に火の玉が！？

それに何で俺へ向けて!?

どうなってるの!!!? マジどうなってるの!!!!??
プチ混乱。嘘。スゲー混乱!!!

目の前で火災が……初めて放火シーンを見た様な気がする。

まあ、放火と言うよりも――、

ボウツツツツ！！！！！！

「殺人ですけどねエエエエエエエエエツツツ……！！！！！！！！！！」

「！！！」

もう一度飛んで来た火の玉を必死に、もう必死にと言う程に走って避ける。

「アンタ何で引き出さない訳！？死亡志願者？それともただの馬鹿！？」

「ああ・・・？」

顔を上げ、見上げる。

すると、ヒラヒラと丈の短いスカートを靡かせ、ついでに長い髪も靡かせた、凄まじい程綺麗な女の子が――宙に浮きながら俺に指を指していた。

・・・もう何でもアリかよ。

この時、俺は死ぬと思った。

だが、これこそがこの偶然とも必然とも奇跡的とも言える俺の最悪が始まるとは・・・思ってもいなかった。

「あつ、パンツ見えた」

Next time『Happiness to him』

第一話Ⅱ平々凡々の青少年Ⅱ『1』Ⅱ巻き込まれる編（後書き）

どうも。書いている時間はこんばんはですね。

ですが読む時間によってはおはようやこんにちはに変わりますね。

今回の小説。

まあ「〜とか」を書いているのに何故これを!?

みたいな自分自身が一番吃驚な感じですよ。

その為この話は不定期です。

一応は「〜とか」の息抜きとなっていますので……。

でもこっちの方が人気出たらもしかしたら……。

なんて言う妄想を広げている馬鹿ですよ。

今回は今まで溜めていた風呂敷を開いて見たら結構詰まっていますね。

ですが繋がりがない箇条書きの様に……。

それを訂正削除を繰り返してこの「通帳」が書けました。

未だに物語の筋道すらも考えてません。

それでも読んでくれれば嬉しいです。

誤字脱字。もう……言って下さい。

土下座&謝罪文&訂正ですよ。

それでは、また次回お会いしましょう。

第二話Ⅱ絶世の美少女Ⅱ『1』Ⅱ巻き込まれる編（前書き）

「〜とか」が全然捗らない。
ヤバイな・・・。

「通帳」が凄く捗る。
飽きた・・・のか？

第二話Ⅱ絶世の美少女Ⅱ『1』Ⅱ巻き込まれる編

立ち並ぶビル。空を覆う様に、塞ぐように。

そのビルの1つ。雑貨ビルの上で彼女は辺りを見渡していた。

綺麗な長い黒髪が風で靡き、前髪を掻き上げる。

少しツリ目のスラリとした体型。

白いポロシャツ。

丈の短い黒いチェックのギャザースカート。

赤と黒のニーソックス。

だが、ポロシャツのロゴにスペイン語で『P i s o u n a b a r b i l l a』『顎を踏みつぶす』と言うのはどうかと思われる。そのロゴさえ無ければ・・・と悔やまれる。

そんな彼女は、100人中99人は「可愛い」や「綺麗」などと言っ
言うだろう。

そう、彼女は美人なのだ。群を抜く程の。

そんな美少女が何故雑貨ビルの屋上に立っているのか。

彼女は小さく息を吐く。

そして、右手に持っていた緑色の通帳の様な物を開く。

『現在残高＋24万』

白い文字でそれだけ書かれていた。

美少女はそれを見つめ、そして溜息を吐く。

「後6万でボーナス・・・か。上手く行けば一人だけで十分だけど」
美少女は呟く。見た目とは裏腹に声は少し大人っぽい感じがする。

「一発で達したいモノね」
呟く。

その時、彼女がいきなり目を瞑った。

「ぐっ・・・これは・・・赤？」

片目だけ開き、辺りを見渡す。

「結構濃かったわね。と、言う事は・・・この近く？」

「ふう〜」と一度息を吐き、そして携帯を取り出す。

プルルルルル——ガチャッ！

ワンコールで電話はかかった。

『どうもおく毎度有難うございます。此方——』

「長いのもう良いわ」

彼女は電話の向こうの言葉を直ぐさま遮る。

『・・・相変わらずだねえ〜レパード』

「そのレパードって止めてくれない？何で私が豹な訳？」
彼女は苛々しながら少し声のトーンを落とす。

『良く言うじゃない。女豹ってさ』

電話から聞こえる声の主は彼女とは反面明るい声のトーンで答える。

「・・・まあ、それは今度そっちに行ったら話し合いよね。みっちり」

『それは怖いなく。で？態々電話していきたくた用件は？引き出しなら携帯の1を5回押せば良いだけの話でしょ？』

声の主は少しトーンを落とす。

彼女は不機嫌な表情のままだが、説明する。

「理由は簡単よ。今から多分戦闘になるから先に引き出すであろう能力を引き出しておこうと思ってね」

『戦闘中に一々携帯いじれないもんね。まあ、それも可能だし良いよ。で、何の能力？』

彼女は携帯を耳に当てたまま、通帳を開き見る。

バイロキネシス

サイコキネシス

テレポート

「そうね・・・発火能力を4。念力を2。それと瞬間移動を2でお願い」

発火能力、念力、瞬間移動。聞けば漫画やアニメ、小説でしか見かけない言葉。

それを彼女はさも当たり前前の様に口にする。

『発火能力は5000円でそれが4つだから2万。念力は1200円、2つで2400円。んで、瞬間移動は3000円が2つで6000円ね。良いよね、君のは安くて。合計で28400円って』

嫌味の様と言う声の主。

「知らないわよ。でも引き出せるモノは少ないわ。同じ相手と戦えば此方の手の内はもうバレバレって言うデメリットもあるのよ。それを考えれば安くて当たり前よ」

それを聞いて声の主は笑う。

『ハッハッハ！！それもそうだね。うん。了解した。使わなかった能力は金額引かれないから、無理して使わなくとも良いよ』

「解ったわ。それじゃ」

用件を済まし電話を切ろうとした時、電話の主が少し笑いを堪える声で言う。

『あつ、そうそう・・・ククッ・・・まだ趣味の悪いロゴが入った・・・ププッ・・・シャツ着ているの？ププッ・・・クク———』

ブツツ———プ———プ———・・・。

彼女は顔を真っ赤にしながら携帯を握っている。
今にも握り潰しそうな程。

「私は・・・好きで着ているのよ・・・好きで着ているのよオオオオオオオオ！！！！！！」

彼女は叫んだ。

そして少し落ち込んでいた。
少し感情の強弱が激しい。

すると、彼女がいきなり笑い出す。

「フフ・・・この気持ち、苛立ち。全て赤い通帳を持つ奴に・・・」

ぶち込んでやるわよオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

再度叫ぶ。

本当に感情の強弱が激しい。情緒不安定とも言える。

すると、彼女はいきなり走り出して屋上から飛び降りる。

一見すれば自殺。彼女はそのまま真っ逆さまに落ちる。

けれども彼女の表情に恐怖は一切ない。
すると、いきなり彼女の体が浮き出す。

念力。

それがこの現象を起こしているのだろう。

彼女は宙に浮いたまま辺りを見渡す。

真下を歩く人はまったくと言って良い程気付いていない。

だが、真横のビルの窓からそれを見ていた会社員は目を何度も擦っている。

彼女はゆっくりと動き出す。

そして、いきなりスピードを上げて姿を消す。

一瞬だけ力を少し放出。

その反発でスピードを上げたのだ。

彼女は下を見渡しながら空を飛ぶ。

すると、空を飛んでいた鳥が隣を飛ぶ。

「何よ？」

先程の苛立ちをまだ消化出来ていない彼女は鳥に当たる。

——カァ。

「はぁ？舐めてるの？」

もう彼女の美少女と言うイメージが崩れている。
情緒不安定な美少女と言うのも考え物だ。

——カァ。

青筋が浮き出ている。

すると、彼女はふと見た先に見つける。

「あれは……」

一度宙に止まる。そして、下を凝視する。

彼女の真下には人が仰向けで何かを見ている。

彼女はそれを凝視する。

倒れているのが誰かではない。その誰かが何を見ているのかが問題だった。

するといきなりその誰かがいきなり起き上がり、何かを凝視している様に見えた。

そこで彼女は唇を舐める。

獲物を狙う獣。先程の電話の主が言っていた豹と言うのは強ち間違っていないのかもしれない。

彼女はゆっくり掌をその誰かに突き出す。

すると、その誰かが彼女を見ている様に見えた。

だが、そんな事は気にしない。

彼女はニヤリと頬を吊り上げた。

そして、

ボウツツツツ！！！！！！！！！！

彼女の掌から火の玉が飛び出す。

発火能力。漫画やアニメの二次には良く見るモノだ。

掌から炎などは結構テンプレでもある。

だが、実際にそれを目の当たりにしたら壮観だ。

だが、その倒れている誰かに取ってはそんな事を考えている暇は無いだろう。

彼女の掌から放たれた火の玉は結構なスピードでその誰かに落ちていく。

「ななななななななななッッッ!!!!!!!!!!!!!!」

その誰かの困惑の声が聞こえる。

ドゴオオオオオオオオオオオンツツツツ！！！！！！！！

爆発音。

[illegible]

!!」

誰かが火の玉を辛うじて横っ飛びで躲いたらしい。だが、爆風でコンクリの壁に激突していた。

その光景を見て、彼女は少し違和感を覚えた。

驚き方に、だ。

「今まで色々な「保持者」と会ってきたけど、異常ね」

彼女は掌を向けたまま呟く。

だが、考えても始まらない。

それに、この状況で相手の事を考えても無駄と思考を切り替える。

そして再度火の玉を発射する。

ボウツツツツツ!!!!!!!!

「殺人ですけどねエエエエエエツツツ!!!!!!!!!!」

!!」

逃げる誰か。だが、結構躲している。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツツ!!!!!!!!!!

「ふんがあツツツツ!!!!!!!!!!!!!!」

逃げる誰かが結局爆風に吹き飛ばされ再度コンクリの壁に激突する。

打ち所が悪ければ死ねる威力でぶつかった。

だが、その誰かはお腹を押さえてのたうち回っている。

その光景を見て、彼女は舌打ちする。

何なの？何なの？『保持者』の癖にあの醜態。
引き出す素振りも見せない。舐めているしか思えない。

彼女はゆっくり降下していく。

その表情は怒り。

そして、その誰かの呻き声が聞こえる位の距離まで近づく。
すると、その誰かが俯せになりながら情けない声で呟く。

「・・・もうゝなんなんだよぉゝ」

それを聞き、彼女は完全に鶏冠に来ていた。

少し落ち着いていた先程の苛立ちがぶり返す。

額に青筋を浮かべ、そして不器用に笑みを作る。

そして、話しかける事も無いだろうと思っていたのだが、流石に話しかけてしまった。

「アンタ何で引き出さない訳！？死亡志願者？それともただの馬鹿
！？」

すると、俯せになっていた誰かが顔を上げる。

「ああ・・・？」

その誰かが彼女を見た瞬間、硬直する。

そりゃあ、宙に浮いているのだ。誰だって驚く。

だが、それと多分だが彼はその宙に浮いているのが美少女だって

そして、彼はゆっくりとゆっくりと彼女の側まで浮き上がってくる。

彼女が彼女の目の前まで来て、浮き上がるのが止まる。

彼は汗をダラダラ流しながら引き攣った笑みで言う。

「・・・やあ？」

彼は本当に大馬鹿野郎なんだろう。

この状況で「やあ？」とはよっぽどの馬鹿以外居ない。もしくは最強の強者ぐらいしか言えない台詞だ。勿論彼は前者だろう。

すると、彼女が微笑む。

その笑みを見て、彼は安堵の息を漏らした。

だが、そこは見抜かないと駄目な所だ。

ポウツツツツ！！！！！！！！

彼女の右手に炎が出現する。

それを見た瞬間の彼の表情は凄まじかった。

終わりを悟った顔か、もしくは「マジかよ！！」と少し考えれば当たり前な事に驚いているのか。多分後者だろう。

彼女は微笑んだまま一言言う。簡単な一言だ。

「・・・死ね」

♪が似合わない一言だ。

「止めてエエエエエエエエエエエツツツ……！！！！！！！！！！」

彼は必死に叫ぶ。

だが、彼が動かせるのは生きるのに必要な臓器や五官だけだった。手や足、頭は勿論動かない。

そんな彼に、彼女は容赦無しに掌を彼に向けた。

彼女は微笑んだまま表情を変えない。

それが凄まじく恐怖を煽る。

そして、

[illegible]

掌から先程の様な火の玉ではなく、ガスバーナーの様に炎が吹き出る。

確実に死ぬだろう。

だが、

「ハイッ！残念だけどストップだね」

彼女の後ろからいきなり声が響く。

彼女はもの凄い勢いで後ろを向く。

するとそこには青い色の入ったサングラスを掛け、継ぎ接ぎだらけの黒いタンクトップに同じく黒いカーゴパンツをウエスタン系のブーツにインしている男が宙に浮いている。

彼女はその様子を見て驚いた。
いや、その男が宙を浮いているのがではない。

その男が肩に背負っている先程彼女が念力で動きを封じ火葬して
やった筈なのだ。

だが、彼は生きている。気を失っている様だが生きている。

彼女は先程とは違う意味で苛立つ。

「……何故アンタが出てくるのよ? 『金貸し』の仕事はその名の通り金を貸すのと私達へのちっぽけな助力でしょ? それが助けに入るって……」

すると、男は笑う。

「ハハッハ! その通りだね。うん。その通り過ぎて面白くないけどね。さてと、質問をしてくれたよね? その質問に答えないといけないね」

「勿体ぶらすんじゃないわよ。答えるならさっさと答える! ! !」

「パンッ! パンッ! !」そう叫び、彼女は手を2回叩く。

「そんな急かして欲しくはないんだけど、まあ簡単に完結にそして優しく説明するならば、彼ね……『保持者』じゃないんだ」

「……は?」

この時、彼女もこの後の事を考えてもいなかった。
偶然か必然か、はたまた奇跡なのか。

奇妙にも、此所から始まる。

「ハハッ！ まあ、驚くよね。でも、それじゃ体が持たないよ？ だって、この世界は偶然と必然、そして奇跡で構成されているのだからね」

） T o n e x t t i m e ） 『 T h e s e n s e t o h e r 』

第二話Ⅱ絶世の美少女Ⅱ『1』Ⅱ巻き込まれる編（後書き）

頑張れ！俺！のモットーで頑張ってます。

第三話Ⅱ金貸しのトップⅡ『1』Ⅱ巻き込まれる編(前書き)

最近全然書けない。

・・・これが本当のスランプ!?

第三話Ⅱ金貸しのトップⅡ『1』Ⅱ巻き込まれる編

「ふう」

男が携帯電話を机に置きながら溜息に似た息を吐く。

その様子を見ていた一人の黒いスーツを纏った赤縁の眼鏡を掛けた女性が尋ねる。

「緑からですか？」

「その色で区別するのは止めた方が良いと思うけどな」

男は机に脚を投げ出しながら注意する。

男の格好は女性とは違いスーツではなく、継ぎ接ぎだらけの黒いタンクトップに黒いカーゴパンツをウエスタン系のブーツにインしている。

髪も黒と銀のツートン。

そして顎に無精髭を生やしている。

「人に動物の名前を付ける人に言われたくありませんね」
女性は机の上に書類を置きながら言う。

「ん？この書類は？」

男は机の上に置かれた書類を手取る。

数枚をホッチキスで纏められた書類。

その数枚を読み、今度は完全な溜息を吐く。

「はぁー……一気に減ったな。オルカには散々こね回されている気分だ」

「通帳に関するルールは結構明確なのですが、『保持者』に対してのルールは曖昧です。その為黒は好き勝手やっている様ですね。一昨日に彼50万突破しましたよ」

赤縁眼鏡の女性が言う。

それを聞いて男は書類を机の上に放る。

「だけど、まあ仕方が無いさね。俺等は金貸しだ。審査員とかじゃない。言わば演出者だろ？出演者に何も言えないさ。まあ、茶々は入れといて良いだろうけどね」

そう言いながら男は赤縁眼鏡の女性を見る。

「茶々ですか？」

「そう。でも俺行く気無いからさ、ヘッジホッグにでも連絡入れて。内容は……」オルカに牽制。殺さず死なずそんな感じでお願い「って」

それを聞いて今度は赤縁眼鏡の女性が溜息を吐く。

「適当ですね。それと、彼の名前はヘッジホッグじゃありませんよ？」

そう注意され、男は手をヒラヒラさせながら笑う。

「ハハハッ！解っているさ。まあ、アレだ。彼は執行の人間だしね。それに性格が針鼠みたいじゃん。トゲトゲしくて触れないみたいな」

「では、何故私は兎なのですか？」

眼鏡を「クイツ」と上げながら尋ねる。

「ん？ラビットはお気に召さないのかい？それは困った。君は寂しがり屋だから合っていると思っただけれど？」

「寂しがり屋って・・・誰情報ですか？それと、兎ってプレイボーイのイメージが強過ぎてあまり好きじゃないんですよ」

赤縁眼鏡の女性が眉間に皺を寄せながら言う。

「それでも俺は寂しがり屋の方が強いなあ。兎の目は泣き過ぎて真っ赤なんだからね」

「今時それを信じる人は居ませんよ」

「あっそう。因みに情報源はマウスからだよね？」

そう男が言う、

[illegible]

叫び声と共に赤縁眼鏡の女性が駆けて行く。

凄まじい速さで。

その様子を見ながら、男は机の上に置いてあつた煙草に手を伸ばそうとした時、その煙草が一瞬で消える。

「煙草は体に良くない。それに、煙草を吸う本人よりもその周りに居る煙草を吸わない人間の方が体に害がある。それに此所は喫煙室じゃない。禁煙だろ？ ラビットちゃんに「壁が黄ばむ！！」と怒ら

れたんじゃないのかったのかな？」

先程まで誰も居なかった。

それなのにいつの間に灰色のスーツを身に纏う男がソファアに座っている。

そしてその男の手の中には煙草が在った。

「人の楽しみは取らないで欲しいなあ〜マニュアル君」

そう言いながら手を出す男。

だが、スーツを着た明らかに偽名であろうマニュアル君は一切返そうとしない。

「あつ、そう言えば。彼は死んでしまったらしいね」

「ん？彼？・・・ああ、ウォーターリリーかい？」

「何で花の名前なんだい？」

「いやあ〜彼の世代の奴には花の名前を付けていたんだ。今は動物だけだね」

男はペンを器用に回しながら答える。

「相変わらずあだ名を付けるのが好きだな」

そう言いながらスーツの男は笑う。

「で、そのウォーターリリーがどうしたんだい？」

男が尋ねる。

スーツの男は笑いながら答える。

「ハハハッ！いや、何。イレギュラーが発生しただけだよ」

「イレギュラー？」

男はペンを回すのを止める。

その瞬間、スーツの男の笑い声も止まる。

静寂。そしてスーツの男が口を開く。

「ああ。偶然か必然か。はたまた奇跡か。あの赤い通帳が予想外にも渡ってしまった。しかも一をリセットされずに、だ」

「・・・と、言う事はアレもか？ウォーターリリーが掴んだあれも消えていないって事か？」

男の雰囲気が一瞬で変わる。巫山戯た雰囲気から一変し真剣は表情になる。

「ああ。そうだろうな。だが、確か・・・今そのイレギュラー君にはあの子が向かっていた様な気がするのだが？気のせいかね？」
スーツの男のその一言で男が焦った表情をする。

それを見てスーツの男は笑う。

「ハハッ！驚いた顔を見るのは久しぶりだな！！」

男は頭を乱暴に掻く。

「大変だよなあ。俺は基本手出し無用の位置に立っていると言うのに」

面倒臭そうに立ち上がり、スーツの男まで近づき煙草を取る。

その取った煙草から一本取り出し、啞えながら話す。

「マニユアル君はこの後どうするんだい？」

「私は『銀行』に顔を出さないと駄目なんだよ。面倒だよ。執行

の代理社長である私はこう言う呼び出しに応じないといけないのだから」

苦笑し、頬を掻きながら言う。

「そりゃあ、大変だ。それなら俺の方がよっぽどマシなのかもしれないね」

そう言いながら男は部屋を出ようとする。

その後ろ姿を見ながらスーツを着た男は笑う。

「ハハハッ！直ぐに君にも呼び出しがあるよ。金貸しのトップなんだ。呼ばれない訳がない」

それを聞いて男は肩を落とす。

「はあ。一々呼んでどうしたい訳なんだろうね。面倒で堪らないよ」

啜えた煙草に火を点けずに上下に揺らす。

そして青いレンズのサングラスを掛ける。

人差し指で「クイツ」と眼鏡を上げながら頬を吊り上げる。

「さてと、お仕事に行ってくるかね。んじゃな、マニュアル君。オートマ君によろしく」

スーツを着た男に背を向けながら手をヒラヒラと振る。

その様子を見ながら、スーツの男はソファアーの上に置いた帽子を被る。

被った瞬間、微笑んでいた表情が曇る。

「・・・大変だよ。本当に」

スーツの男はそう言いながら先程まで男が足を投げ出していた机

に一通の手紙を置く。

「『Blind criminal』・・・偶然か必然か。はたま
た奇跡・・・か」

そう言い残し、スーツを着た男は一瞬で消える。

大きな振り子時計は静かに左右に揺れ——静かな時が流れる。

男は対峙していた。

肩には至って普通の男子高校生を担ぎ、目の前には悪趣味なロゴ
の入ったポロシャツを着る美少女。

男はニヤニヤ笑いながら、頭を掻く。

「いやいや、良かったよ。彼が火葬される前に間に合って。こんな
所で一人の青少年の尊い命の灯火が消える所だった。ああ〜良かった、良かった」

男は担いでいる青少年の頭を「ポン、ポン」と叩く。

その様子を見ていた美少女は奥歯を噛みながら怒鳴る。

「どうでも良い！！そんな事はどうでも良い！！そんな事より、その男が『保持者』じゃないってどう言う事よ！！その事を説明しなさい！！例えアンタが金貸しのトップだろうが、私はアンタを敵と認識するわよ！！？」

男を指さしながら、美少女は叫ぶ。

それを聞きながら、男は目を細める。

「そう怒鳴りなさんな。君は本当に見た目美人だけど中身ブスだよね。性格ブスと言うか。口が悪いよ。女性はもっとお淑やかじゃないとね」

美少女が怒鳴っているのと反面、男は冷静。

「ブス言うなッ！！本当にアンタはムカツク！！その口は何なの！？人を怒らせる事しか出来ないの！？」

美少女は良く解らないジェスチャーをしながら叫ぶ。

「まあ・・・兎に角事務所に行こうか。彼の目が覚めたら説明して上げるよ」

そう言いながら空中を歩く。

それを見ながら更に美少女は怒り出す。

「何でその男を優先に私の時間が削られなければならないの！？そんな奴無理矢理起こせば良いでしょ！？」

「いやいやあゝ、彼を気絶させたのは君の発火能力だよ？誰のせいだと思ってるのやら・・・『保持者』見つけたら無闇矢鱈に攻撃するのはどうかと思うけどね」

美少女は「クウ・・・」と声にならない声を出しながらトボト

ボと歩き出す。

その様子を横目で見ながら男は微笑む。

それに気付いた美少女は男を睨む。

「・・・何よ？」

「ん？ いやいや、結局素直なんだなって思ってたさ」
そう言いながら歩き出す。

「なっ！ 結局って何よ！！ ねえ！！？」

美少女は叫び、男はケラケラと笑いなが歩く。

この物語の主人公は？

そんな事を思ってしまう。

To next time 〽 Both the secret
and the secret 〽

第三話Ⅱ金貸しのトップⅡ『1』Ⅱ巻き込まれる編（後書き）

まだ掴めない。

それだけ・・・そう・・・それだけ（泣

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361m/>

通帳【Bank book】～偶然と必然で奇跡的に巻き込まれた青少年の物語～

2010年10月10日17時46分発行